

# シヨウニカンゴガクジツシュウニオケルカンゴカク セイトシヨウニノカカワリ : プロセスレコードノナ キヨウブンセキカラ

榊崎, 美奈子

大池, 美也子

<https://doi.org/10.15017/297>

---

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 28, pp.69-74, 2001-02. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン :

権利関係 :



# 小児看護学実習における看護学生と小児の関わり

—プロセスレコードの内容分析から—

榊 崎 美奈子 大 池 美也子

## The Relation Between Student Nurses and Sick Children in the Training of Child Care Practice.

—Analysis of Process Records for Child Care—

Minako Masuzaki, Miyako Oike

### Abstract

We analyzed the process records of speech and behavioral patterns of both student nurses and children written by the students during the practice term of child care. The words and behaviors of the children described in the records were proportional to the level of their psychological development. Students well understood the characteristics of the children and, took care of them according to their developmental level. With regard to the nursing practice, however, students showed some problems such as immaturity of nursing skills for improving development of children, lack of careful observation of children, and difficulty in establishing mutual communication with children in early adolescence.

Key Words: child care practice, student nurse, process record

### I はじめに

核家族化・少子化社会において、現代の看護学生は子どもと接する機会が少ないといわれている。そのような看護学生にとって、小児看護学実習における小児とのコミュニケーションは、小児から拒否されるのではないかという不安やストレスの要因になっている<sup>1) 2) 3)</sup>。また、小児は、発語を始めとする言語理解や対人関係などコミュニケーションに関わる能力が成長・発達段階にあるため、その段階に対応した効果的なコミュニケーション技術が看護学生に求められている。

小児看護学実習におけるコミュニケーションを中心とした小児と看護学生との関わりに関する報告は少なく、その中で遠藤<sup>4)</sup>や岡村<sup>5)</sup>の報告がある。これらの報告は、看護学生の特徴的な対応方法やコミュニケーションに対する意欲向上を目指した録音器の使用であり、小児ではなく看護学生

の言動を中心とした分析結果にとどまっている。小児と看護学生との関わりを明らかにするには、小児看護学実習の学習目標でもある小児の成長・発達の特徴を捉えるとともに、看護学生と小児との相互作用的視点が重視されなければならない。

本研究では、小児看護学実習を経験した看護学生のプロセスレコードから、入院中の小児に対する看護学生の関わりかたを小児の成長・発達の特徴を含めて明らかにし、今後の実習指導の示唆を得ることを目的とする。

### II 研究方法

#### 1 研究対象

平成11年度小児看護学実習（5月31日～11月26日）において看護学生3年生61名が実習2日目に記述したプロセスレコード61件のうち、小児と看護学生の関わり場面を示す37件とした。実習初日

では小児と看護学生の関わり方の困難さを予測し、実習2日目をプロセスレコード記述に選定した。また、母親の言動が含まれているプロセスレコードは、小児の言動に影響すると考え除外した。

### 2 分析方法

プロセスレコードに記述された小児と看護学生の言動をデータとし、それらを言語・非言語に分類した。分析単位をセンテンスと定め、その意味内容が捉えにくい場合は前後の文脈から判断し、解釈した。分析経験のある研究者を含む2名の研究者でこれらを逐語訳的に分析し、小児と看護学生それぞれの言語・非言語をカテゴリー化し、分類した。小児の言動では、小児の成長・発達段階をカテゴリー抽出の視点とし、看護学生の言動では、小児看護の目標である「小児の生命を守ること」、「小児の健康を増進すること」、「小児の苦痛をやわらげ回復を促進すること」<sup>6)</sup>に向けた看護行為をそれぞれカテゴリー抽出の視点とした。

## III 結果

### 1 プロセスレコード37件の概要

小児の年齢は3か月～15歳2か月であった(図1)。小児の疾患は白血病が12件(32.4%)、白血

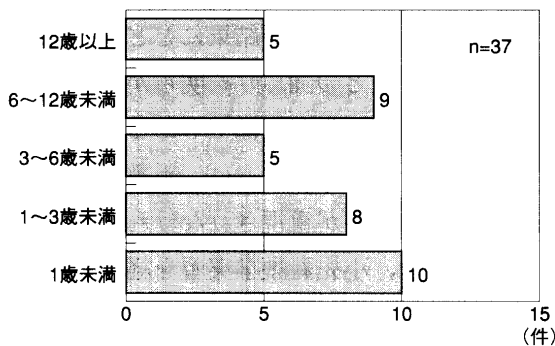


図1 小児の年齢

病以外の血液疾患が6件(16.2%)、腎疾患5件(13.5%)、循環器疾患4件(10.8%)、神経疾患3件(8.1%)、筋疾患・悪性新生物・合併症を有する疾患がそれぞれ2件(5.4%)、消化器疾患1件(2.8%)であった(図2)。この中でコミュニケーションに影響する精神発達遅滞が含まれる疾患は2件(5.4%)であり、いずれも神経疾患であった。看護学生と小児の関わり場面の主なものは、遊びの場面が11件(29.7%)であり、情報収集や

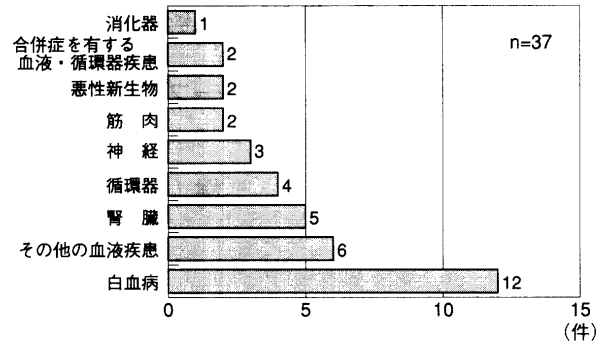


図2 疾患の種類と件数

観察・バイタルサイン測定の場合がそれぞれ5件(13.5%)、看護技術の提供・モーニングケアの場面がそれぞれ4件(10.8%)、食事や啼泣場面がそれぞれ3件(8.1%)、挨拶場面が2件(5.5%)であった(図3)。

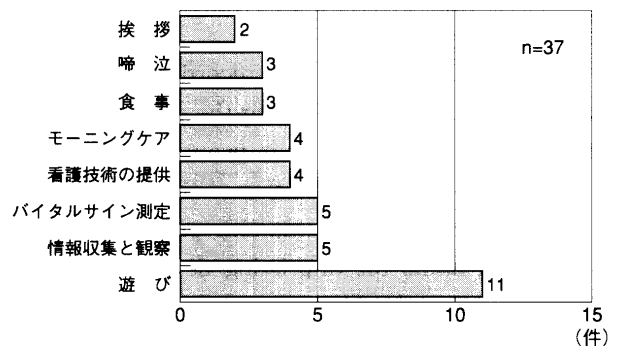


図3 関わり場面の種類と件数

### 2 プロセスレコード内容の分析結果

プロセスレコード37件の総記述件数は548件であった。これらの記述を意味内容の類似性に基づき分類し、小児と看護学生の言語・非言語のカテゴリーを抽出した。それぞれの主なカテゴリーについて以下に述べる。なお、抽出したカテゴリー名を下線で示す。

#### 1) 小児の言語のカテゴリー(表1)

小児の言語の記述は69件であり、10個のカテゴリーを抽出した。

1歳未満の小児では言語のカテゴリーを抽出せず、1～3歳未満の小児では「いや」という否定的な返事・回答を、3～6歳未満の小児では、「いや」「うん」という否定的・肯定的な返事・回答および「絵本をよんで」という依頼・要求を抽出した。6～12歳未満の小児では、「お母さんが来てから薬は飲む」という自らの意思表示や「犬ごっこ」という具体的な遊び内容の提示を抽出した。12歳

以上の小児では、曖昧さを含む返事・回答と学習経験や行動に対する説明を抽出した。

2) 小児の非言語のカテゴリー (表1)

小児の非言語の記述は190件であり、17個のカテゴリーを抽出した。

1歳未満の小児では、しかめっ面、笑顔などの表情の変化や啼泣とその停止、寝返りや手足をばたつかせる運動を抽出した。1～3歳未満の小児では、喃語による発語や対象物への注視と視線の動き、目的達成や意思表示を含む動作を抽出した。

表1. 小児の言動 (数値は記述件数)

言語の項目	1歳未満	1歳～3歳	3歳～6歳	6歳～12歳	12歳以上
返事・回答(43)	0	6	5	7	25
意思表示(7)	0	0	2	3	2
説明(7)	0	0	0	1	6
提示(3)	0	0	1	2	0
依頼・要求(3)	0	0	2	0	1
特定対象の呼名(2)	0	2	0	0	0
特定対象に関する問いかけ(1)	0	0	0	0	1
迷い(1)	0	0	1	0	0
歌う(1)	0	1	0	0	0
挨拶(1)	0	0	0	1	0
小計	0	9	11	14	35
合計					69
非言語	1歳未満	1歳～3歳	3歳～6歳	6歳～12歳	12歳以上
動作(49)	3	22	11	7	6
表情の変化(30)	12	5	0	8	5
注視と視線の動き(25)	8	6	0	10	1
運動(14)	13	0	0	1	0
発語(12)	4	7	1	0	0
啼泣とその停止(11)	11	0	0	0	0
同一体位の保持(11)	0	3	3	1	4
遊び(8)	0	0	2	6	0
体位の変化(5)	0	5	0	0	0
自立的な生活行動(5)	0	0	3	2	0
反応に基づく連続運動と模倣(4)	0	4	0	0	0
沈黙(4)	0	0	2	2	0
感情の表出(3)	0	1	2	0	0
呼吸, 吸啜, 流涎の生理的反応(3)	3	0	0	0	0
外部刺激に対する無反応(3)	3	0	0	0	0
治療への参加活動(2)	0	0	0	2	0
開眼(1)	0	0	1	0	0
小計	57	53	25	39	16
合計					190

3～6歳未満の小児では、意思に基づいた動作、食事摂取など自立的な生活行動を抽出した。6～12歳未満の小児では、特定の対象を意識した注視と視線の動きや表情の変化を、12歳以上では、頭をかく、うつむくという不明な動作や表情の変化を抽出した。

2) 看護学生の言語のカテゴリー (表2-1)

看護学生の言語の記述は225件であり、15個のカテゴリーを抽出した。

1歳未満の乳児に対する看護学生の言語では、名前の呼びかけや「悲しかったの」などの推測内容を含む問いかけ、「体重はかろうね」などの小児に対する次の行動の提示・提案・提供を抽出した。1～3歳未満では、「一緒に遊ぼう」などの誘いや提示・提案・提供を抽出した。3～6歳未満では、片付けをしようなどの特定行為を求める誘い、また片付けをしてくれたら本を読んであげるなどの条件提示をした遊びの提供を抽出した。6～12歳未満では、特定対象に関する問いかけや「今日は帰るね」など看護学生自らの行動の提示・提案・提供、「薬を飲もう」という依頼・要求を抽出した。12歳以上では、「気分悪くない?」という推測内容や「ご飯食べる?」という特定行為を含む問いかけ、学習経験の確認を抽出した。

4) 看護学生の非言語のカテゴリー (表2-2)

看護学生の非言語の記述は64件であり、10個のカテゴリーを抽出した。

表2-1. 看護学生の言動 (数値は記述件数)

言語の項目	1歳未満	1歳～3歳	3歳～6歳	6歳～12歳	12歳以上
問いかけ(54)	11	7	4	17	15
あだ名, ちゃん, 君付けを含む呼びかけ(46)	12	18	9	7	0
提示・提供・提案(40)	12	6	7	8	7
誘い(23)	2	10	8	2	1
賞賛(11)	4	3	3	0	1
小児に対する表現の工夫(11)	5	2	1	3	0
依頼・要求(9)	2	0	2	5	0
確認(7)	0	0	1	0	6
挨拶(7)	0	2	0	4	1
説明(6)	0	2	2	1	1
返事・回答(6)	0	0	0	1	5
感嘆(2)	0	1	0	0	1
ねぎらいの言葉(1)	1	0	0	0	0
謝罪(1)	1	0	0	0	0
話題の転換(1)	0	0	0	0	1
小計	50	51	37	48	39
合計					225

表 2-2. 看護学生の言動 (数値は記述件数)

非 言 語	1 歳 未 満	1 歳 〜 3 歳	3 歳 〜 6 歳	6 歳 〜 12 歳	12 歳 以 上
目的達成に向けた看護的行為(17)	16	0	0	0	1
身体接触(15)	5	4	5	1	0
提示(10)	2	8	0	0	0
表情の変化(7)	0	2	0	2	3
視線の調整と一致(6)	2	2	0	0	2
観察行為(4)	1	1	0	1	1
接近(2)	0	0	1	0	1
距離を置いた位置(1)	0	0	0	0	1
移動への援助(1)	0	0	1	0	0
沈黙(1)	0	1	0	0	0
小 計	26	18	7	4	9
合 計	64				

1歳未満の乳児に対する看護学生の非言語は、沐浴や血圧測定などの目的達成に向けた看護行為、抱くあるいは体を揺らすなどの身体接触を抽出した。1～3歳未満では、おもちゃやテレビを見せる対象物の提示を、3～6歳未満では、「抱っこをしてベッドに連れて行く」「頭をなでる」などの身体接触を抽出した。6～12歳未満では、看護学生自身の表情の変化を、12歳以上では、患児との視線の調整と一致や患児のそばに近づく接近を抽出した。

## IV 考 察

### 1 場面から見た小児と看護学生の関わり

看護学生が記述したプロセスレコードの関わり場面は、遊びが最も多かった。遊びは小児看護学実習において看護学生が高頻度に経験するケア内容である<sup>7)8)</sup>。本研究においても同様の結果であり、遊びは看護学生にとって最も取り入れやすい小児との関わりかたといえる。また、津波古によると臨床場面での遊びを通じたコミュニケーションの目的には、関心や安心感を伝えること、ストレスの対処方法を伝えること、喜びを伝えること、発達を促すための刺激の4つがある<sup>9)</sup>。さらに中島らによると、遊びを通じた看護学生の学習内容には、小児の理解や援助技術の必要性あるいは関係の構築がある<sup>10)</sup>。今回の研究では、看護学生の関わりとこれらの目的との関連性や学習内容を明らかにしていないが、遊びを取り入れた看護学生の関

わりは、小児との関係構築に役立つものと考えられる。

### 2 言動から見た小児と看護学生の関わり

小児の言語に関するカテゴリーは、1歳未満で喃語を、それ以降の発達段階では、返事・回答や依頼・要求、意思表示あるいは説明であった。これらのカテゴリーは、意味のない発語から一語文で表現できる有意語へ、さらに自己表現や思考の手段として説明できる。

非言語に関するカテゴリーは、1歳未満で運動を、1歳以降では動作を、3～6歳未満では自立的な生活行動や意思表示を含む動作であった。これらのカテゴリーは、小児の反射運動から意思による随意運動への変化であり、自立行動が確立していく過程を示す。学童期以降では他者を意識した視線の動きや動作のカテゴリーが抽出されており、これは他者の反応の知覚によって形成される<sup>11)</sup>自己概念の発達に向けた行動として考えることができる。

さらに、看護学生自身の言動に関するカテゴリーでは、乳児に対する「よ」「ね」の語尾と身体接触を抽出した。このような語りかけやスキンシップは、愛着を形成するために役立つ母性行動<sup>12)</sup>といえる。幼児との関わりは、言動の中でも遊びを活用している。これはコミュニケーションに必要な思考・認知・情動・感受性・表現力などを刺激する<sup>13)</sup>意味ある関わり方といえる。また、学童期以降では、言語を中心とした問いかけが多く、抽象的思考の道具として言葉を使用する<sup>14)</sup>学童期の特徴を捉えたものと考えられる。

抽出されたこれらのカテゴリーは小児の発達の特徴と一致しており、プロセスレコードによる分析の妥当性が示されるとともに、小児の発達の特徴に応じた看護学生の関わりかたが明らかになった。

しかし、これらの関わりかたから、看護学生が小児の発達の特徴を理解したうえで対応しているとは言い難い。例えば、言語的表現が少ない小児にとって重要な観察行為の記述件数は、わずか4件である。また、自立を目指す幼児期後半の小児に対して「抱いてベッドに連れて行く」看護学生の行動は、小児の発達を促す関わりとは言い難い。

さらに、12歳以上の言語カテゴリーは、約70%が返事・回答であり、これは看護学生の「はい」「いいえ」で返答できる問いかけや提示による関わりの結果と考える。特に12歳という思春期の小児は、自立と依存との葛藤、受験・病気や入院によるストレスなど多くの危機に直面している。「はい」「いいえ」で返答できる問いかけや提示では思春期の小児を理解することは困難と考える。

このような看護学生の対応は、小児の発達的特徴の理解が不十分であることを示唆し、対象である小児を理解した関わりができていないと言える。小児のみならず対象を理解するうえで、観察やコミュニケーションは大切な手段である。小児を一人の人間として尊重し、理解するためにも、小児看護の特徴としてだけでなく、看護そのものにおける観察やコミュニケーションの重要性を指導していくことが必要であろう。

## V まとめ

小児看護学実習において、小児を対象とした看護学生によるプロセスレコードを内容分析した結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 特徴的な関わり場面は遊びであった。
- 2) 看護学生が記述した小児の言動は、一般的な小児の発達的特徴と一致し、看護学生は、小児の発達的特徴を捉えた関わりを行っていた。
- 3) 小児の発達を促す関わりかた・思春期の小児に対するコミュニケーション・観察に関する未熟さがあった。

## VI おわりに

本研究の目的は、小児と看護学生の関わりの実態を明らかにすることにあつたため、看護学生が記述したプロセスレコードの言動のみの分析に止めた。しかし、看護学生の関わりが小児を理解した関わりであるかについては、プロセスレコードの考察や他の実習記録を照合することも必要であろう。今後は、看護学生の思考の分析を行い、看護者として小児を理解した関わりができていくかを明らかにしたい。

## 《付記》

本研究は、2000年3月に実施された第4回日本看護研究学会・九州地方会において発表した発表原稿を加筆・修正したものである。

## VII 引用文献

- 1) 河合洋子他：小児看護学実習評価と実習直前・直後における学生の不安，名古屋市立大学短期大学部紀要，6，31-38，1994
- 2) 久保田まさ代他：小児看護実習における学生の不安についての一考察，医療増刊，50，284，1996
- 3) 吉田礼子：小児看護実習におけるストレスと学生の経験，日本看護学教育学会誌，7(2)，124，1997
- 4) 遠藤小夜子他：看護学生と健康児のコミュニケーションに関する検討，日本看護研究学会雑誌，12(2)，41，1989
- 5) 岡村千鶴他：小児看護学実習におけるコミュニケーション能力が向上するための指導方法，日本看護学会24回集録看護教育，40-42，1993
- 6) 馬場一雄他：系統看護学講座 専門21 小児看護学1，p10，医学書院，東京，1999
- 7) 奥野順子他：小児看護学における体験を通して身につける技術の位置づけの検討，東京女子医科大学看護短期大学研究紀要，17，65-72，1995
- 8) 寺田敦子他：小児看護実習における学生のケアの内容について，日本看護研究学会雑誌，20(3)，107，1997
- 9) 津波古澄子：小児の遊びとコミュニケーション，Quality Nursing，2(6)，484-489，1996
- 10) 中島登美子他：小児看護実習における子どもの集団遊びからの看護学生の学び，日本看護科学学会誌，15(3)，227，1995
- 11) 舟島なをみ：看護のための人間発達学，医学書院，東京，1999，p86
- 12) 安藤朗子：母子間における健全な愛着と不安をともなった愛着，小児看護12(4)，42-458，1989
- 13) 片田範子：遊びの中のコミュニケーション，馬場一雄他（編）：看護とコミュニケーション，金原出版，東京，1986，pp55-58

- 14) 木村登紀子：ことばの発達と臨床，岡堂哲雄  
（代表）：小児のための発達臨床心理，へるす出版，東京，1998，pp63-79